



まちづくり情報特派員特集

# プロジェクト kaisei

挑戦者たち Challenger

## 「瀬戸屋敷の歴史」

男は言った。  
「親しみやすくふるさと感じられる交流拠点を作りたい。」  
男の名は瀬戸公雄さん(岡野)。当時、農政を担当していた町職員だった。これは古民家を人々の集いの場とするために奔走した人たちの熱きドラマである。

建物の改修と並行してワークショップを企画し、町民参加を募り4年の年月を掛け、瀬戸屋敷の運営活用方法を検討した。  
小学生の体験学習として土蔵壁の土こねや茅束の手入れなども行った。建設現場が学習の場になった。土蔵内部の壁板の下地に多数の町民が未来に向けたメッセージを書いた。土蔵全体がタイムカプセルになっているのだ。皆の想いが一つひとつ

### 町民参加の文化財づくり

「楽しかったなあ。何しろ初めてのことばかりで。長野県や秋田県などに古民家を活用している事例を勉強に行き、囲炉裏で地元の人が昔話をしながら栗を焼いている姿を見て参考にしました。改修の完了まで1年を切った頃土蔵前のケヤキの木が台風で倒れて屋根の一部が破損するトラブルにもありました。あの時は慌てたな。」瀬戸さんは目を細めながら語った。  
瀬戸屋敷がこの町の原点のひとつであり、ここからまた新しいものが生まれていく。これからもきっと笑顔が絶えない場所であり続けるだろう。

### 取材後記

瀬戸屋敷に併設されたカフェでこの記事を書いていると現在に至る過程に携わった人々の想いを切々と感じる。人の出会いの場、季節を感じられる場所として今日も大勢の人が訪れていた。瀬戸さんをはじめ多くの方が20年前から一つひとつ描いた風景が現実になったのだ。  
子どもの遊ぶ声が広い空に響き渡った。木々の新緑が目まぶしかった。

まちづくり情報特派員 石塚 敦



メッセージが書かれた土蔵内部の壁板の下地

### 発想の原点

平成10年、今から20年前、県のふるさと「あしがり郷」整備計画に基づき、その拠点施設が北部農村地域にある18世紀初頭に建造された茅葺き屋根の古民家瀬戸家となった。改修の原点は、約1800坪の敷地と建物一式全て、瀬戸家からの寄附だった。  
「みんなに使ってもらおう本物の文化財として後世に伝えていこう」と、当時の町経済課(現産業振興課)内にプロジェクトチームが立ち上がり、瀬戸さんを含め3人でのスタートだった。

### 待ちに待った完成

平成17年5月27日、町制施行50周年の節目の年に瀬戸屋敷オープン式典が行われた。現代に蘇った古民家の前には、オープン前から住民の力で瀬戸屋敷を応援しようと立ち上がった瀬戸屋敷倶楽部の皆さんの姿があった。

### そして、今

つ形になっていった。



①一番右が田中さん  
②店内の壁に和紙を貼る作業

# みんなのチカラ

## 学生の力を活かしたリノベーション

芝浦工業大学  
建築学生による地域活性化団体  
空き家改修プロジェクト

開成町設計室  
室長 田中 陸美さん(修士2年)

学生の発想で  
空き家を地域資源に  
この取組みは、瀬戸屋敷スタッフの森本健介さん(みなみ)が大学院在学中に創設したプロジェクトで、全国で課題になっている空き家の、建築を学ぶ学生が地域と連携しながら新たな地域資源に再生するものです。今回、瀬戸酒造店の店舗の改修を手掛けました。  
「設計や実測を2017年4月から始め、12月に完成しまし

た。月に1回程度、町に来て作業し、夏休みには1週間、町に泊まり込んで集中的に作業しました。」  
と話すのは、開成町設計室長の田中さん。  
「一番大変だったのは、予算でした。いかに最小限の予算で、学生ならではの発想や工夫で改修するか、何度もオリエンタルコンサルタンツの皆さんと検討しました。」

## 茅の葺き屋根を後世へ

古民家ガーデン 紋蔵

日本家屋の伝統様式の一つ、茅葺き屋根。開成町北部地域には、4軒の茅葺き屋根の家が現存しています。その一つである「古民家ガーデン 紋蔵」の屋根の一部補修が実施されました。たくさんの方に作業を見てほしいと、4月14日(土)と15日(日)には公開イベントが開催され、県内から約100人が訪れました。

紋蔵を利用する有志が、静岡県朝霧高原の茅場で茅を刈り取り、山梨県から職人を招き、町内在住の茅葺き職人見習いの秋澤さんも作業に参加しました。  
伝統の茅葺き屋根を後世に伝える活動が始まっています。



今回は、屋根の葺きを補修した